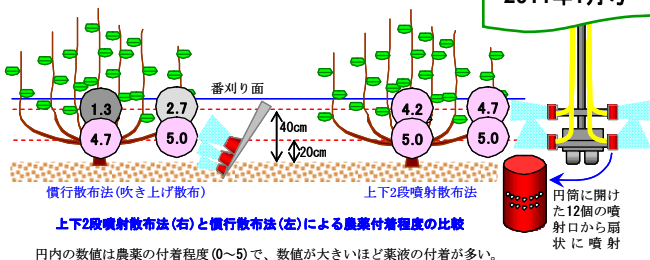


茶園のクワシロカイガラムシ防除に有効な「上下2段噴射散布法」

No.99
2011年1月号



クワシロカイガラムシの防除は、農薬による防除が一般的ですが、自然仕立てのてん茶園では密集する枝幹に阻まれ、防除効果が不安定でした。そこで、株元からの上向き噴射と同時に番刈り面から水平に噴射する散布を考案しました。この方法では株内部でも十分な薬液の付着を得ることができるため、防除効果が向上します。

チャの新梢枯死症
その原因と防ぎ方

夏から秋にかけて、チャの芽が硬化して枝になるころに、枝が赤く枯れる症状が発生します。この原因は輪斑病菌と赤葉枯病菌によるものと判明しました。現在では、殺菌剤散布による防除等により被害が減少しました。

(No. 24 1989年4月号)

てん茶の品質は葉の厚さ

てん茶の品質と生葉の形質の関係を調べたところ、生葉の厚さが薄いものほど品質が良いことがわかりました。生葉の厚さは、安価なマイクロメーターで測定でき、高品質てん茶生産には、生葉の厚さ200μmまでが新葉摘採時の目安となることがわかりました。

(No. 54 1996年10月号)

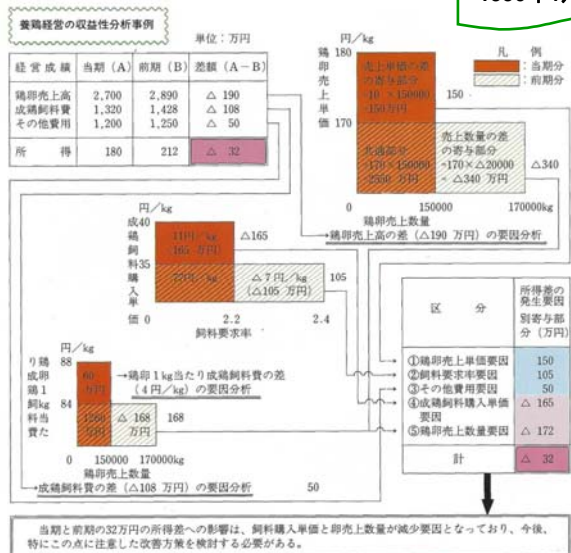
大規模水田作経営の営農モデル

協業経営（経営受託60ha、作業受託延べ50ha）、家族経営（経営耕地6ha、作業受託延べ160ha）の営農モデルを策定しました。* 県内で91年当時大規模水田作経営体（経営耕地5ha以上）が占める耕地面積シェアは22%でしたが現在では45%となり、大規模水田作経営体の経営耕地面積シェアは年々増加しています。

(No. 31 1991年1月号)

養鶏経営の所得分析法

No.28
1990年4月号



年度間の経営成績（所得）の差を、卵売上単価、飼料要求率、その他費用、飼料購入単価、卵売上数量の5つの要因に分けて考える分析法です。この分析を行うことで、所得の差に影響したそれぞれの要因ごとの額が明らかになり、効率的な経営改善に役立てることができます。

地域営農の育成調整組織の
活性化評価法

No.48
1995年4月号



農用地利用改善団体（調整組織）は、農地の集積や効率的な生産基盤を整えるのに重要な役割を担っています。そこで組織の活性化評価法を考案しました。この方法により調整組織を4つに分類することができます。

系統豚

産子数の多い大ヨークシャー種
新系統豚「アイリスW2」

No.77
2003年10月号



系統豚大ヨークシャー種「アイリスW2」、デュロック種「アイリスナガラ」及びランドレース種「アイリスL3」の3品種が、県内農家の約7割で利用されています。

産肉性の高いデュロック種
新系統豚「アイリスナガラ」

No.87
2007年3月号



産子数の多いランドレース種
新系統豚「アイリスL3」

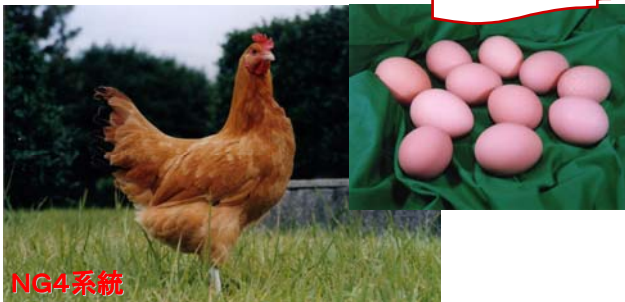
No.99
2011年1月号



名古屋コーチン

卵用名古屋コーチンを開発

No.66
2000年1月号



NG4系統

「卵用名古屋コーチン」の卵は独特の鮮やかな桜色をしており、その味は濃厚なことから、高い人気を博すようになりました。現在では新たな愛知ブランドとして定着しています。

体型が大きくなった名古屋コーチンは1980年代から地鶏肉の生産に用いられ、その肉質や味の良さから全国で最も知名度が高いブランド地鶏となっています。

大きくなりました—名古屋コーチン—

No.3
1984年1月号



NG2系統

かしわの横綱「名古屋コーチン」が
ボリュームアップ

No.33
1991年7月号



NG3系統

堆肥化施設の悪臭防止には
スポット脱臭が有効

No.21
1988年7月号



スポット脱臭堆肥化施設

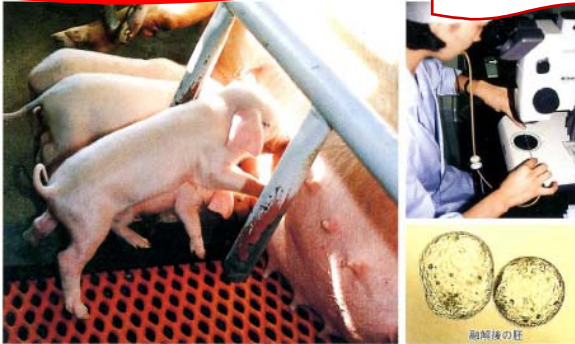


従来の堆肥化施設

スポット脱臭は攪拌機に搭載したブロワで攪拌部分の悪臭を吸引し、堆肥の中へ吹き込み、悪臭を吸着させる技術です。この方法で悪臭の約90%が除去されることが分かりました。

凍結保存した受精卵（胚）
の移植で子豚が誕生！

No.52
1996年4月号



胚の凍結保存が難しかった豚で超急速凍結法（ガラス化保存法）を開発し、この手法としては世界で初の凍結胚由来の子豚を得ることに成功しました。

体細胞クローン牛が誕生

No.67
2000年5月号



県畜産総合センターが飼育する高泌乳牛の体細胞を用い、遺伝的に同じ形質を持つ子牛を生産することに成功しました。「クローン技術」により胚操作に関する研究が進展し、今後の改良等への利用が期待されます。

肥育豚の飼料改良で
銅・亜鉛排泄量を低減

No.74
2002年11月号



「フィターゼ」という酵素を添加し、肥育豚用飼料中の銅・亜鉛の利用率を高める飼料を開発しました。この飼料の利用により銅・亜鉛の排泄量が大幅に低減できました。

おふくろは乳牛、おやじは和牛
「乳和牛」による牛肉生産

乳牛の雌に和牛の雄を交配して生産される交雑種は、県内の肉用牛の約7割を占め、知多半島などでは交雑種を利用した乳肉複合経営が盛んとなっています。
(No. 24 1989年4月号)

CTスキャンで生きたまま
牛の肉質・肉量を判定

枝肉にしないと分からなかった肉質や肉量を、生きたままで測定することが可能になりました。
(No. 30 1990年10月号)

家畜ふん堆肥
ブレンドとペレット化で利用促進

牛、豚、鶏、うずらなどの家畜ふん堆肥をブレンド、ペレット化することで様々な耕種場面に利用しやすいことが分かりました。
(No. 50 1995年10月号)

名古屋コーチンのDNA識別法を開発

「名古屋コーチン」をDNAレベルで他の鶏と識別する技術を開発しました。(No. 91 2008年7月号)